



DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siege : Oden Building 21-4

Higashi Marunouchi Tsu JAPON

N° 34 octobre 1995 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

# NON ! AUX ESSAIS NUCLEAIRES

## シラク仏大統領宛て 核実験中止を要請

### 真の日仏友好ねがって 三重日仏協会

フランスの新大統領ジャック・シラク氏は、就任間もない6月13日、南太平洋で9月に核実験を再開すると予告、世界の厳しい世論にさらされましたが、あくまで方針を変えず、間近に実験強行が濃厚となったため、9月4日、三重日仏協会は在日フランス大使館経由でフランス大統領宛てに下記のような電報を送り、実験の中止を要請しました。これは電文が示すように、唯一の被爆国民としていつさいの核兵器を拒否する立場から、日仏両国民の真の友好と相互理解を願って送られたものです。

なおフランス語文は電報では打てないため日本語とし、フランス語訳は同時に郵送いたしました。

#### 電 文

ジャック・シラク大統領 殿

あなたの核実験再開の決定について、私たちは怒りと深い悲しみを感じています。その強行は人類への挑戦であるとともに、日本とフランスの友情にとって大きな障害になるものだからです。わたしたちはあなたがその決定をただちに取り消すことを要請いたします。

1995年9月4日

三重日仏協会



# “核実験について”

J-F.ダメムさんのご意見（寄稿）

三重日仏協会がフランス大統領に核実験中止の要請をおこなうことについて、ジャン＝フランソワ・ダメム氏（松阪市在住・本会理事）は、「私も原爆反対だが、一定の意見があるので、会報〈どんく〉に掲載してほしい」と、以下の文章を寄せられました。事務局で翻訳し、原文は別紙で折り込みました。会員の皆様のご意見をお待ちします。

私に特に好きな作家がいるとしたら、それはマルセル・パニョルでしょう。彼は簡明かつ論理的な文体によって、もっとも深刻で、繊細微妙な事柄を表現することのできた作家です。しかも決して憎しみを書くのではなく、愛をもって。

私はパニョルのすばらしい著作〈Manon des sources〉の一節を引用したいと思います。

——両手をポケットに入れ、頭を下げて彼は花壇の真ん中に進んでいった。突然彼は立ち止まり、顔を上げ、力を込めて答えた。「いや、そうじゃない！ いけないのは最初に間違えた人だ。で、だれが始めたんだ？ それは君だ。」

さて、ジャック・シラクはなぜ核実験再開の決定をくださったのでしょうか？ 私の考えおよび唯一のもっともな答は……「で、誰が始めたんだ？」

このような問題で、誰も一つの国や国民を裁くことはできません。フランス人が戦争を好んでいるなどと考える権利は誰にもありません。これまでに40人以上のフランス兵士（カスク・ブルー）がボスニアで平和を守るために命を捧げました。世界各地の紛争で（ルワンダやザイールで）、フランスはいつも人道的な立場から前線に立っています。この決定はジャック・シラクが一人で下したものです。それは多分誤りでしょう。フランスの最近の調査は、およそ60%のフランス人が実験の決定に反対していることを示しています。私はこのような決定は国民会議の採決か、国民投票にかけられるべきだと思います。

世界でどれだけの国が核兵器を持っているのか、日本人はほんとに知っているのでしょうか。世界でどれだけの国が核爆弾をひそかに作ろうとし続けているのか（例えばイラク、イラン、北朝鮮など……）。これらの国々の疑惑は、人類に対する脅威になっていないでしょうか？

原子爆弾は一種の先端技術です。そしてすべての先端技術と同じように、それは実験と調査を必要とします。残念ながらフランスは政治的、科学的な理由から、遅れを重ねてきました。核の技術をマスターすることができずに、どうして核爆弾を持っていると言うことができるでしょう。このいくつかの実験は時間との競走なのです。8回の実験が予告されています。でももしわれわれがレーザー・シミュレーションに必要な技術を得ることができたら、すべての爆発が実行されることはないでしょう。

しかし不幸にして、多くの国がこの恐ろしい兵器を所持しています。フランスの核の力は攻撃的なものではなく、抑止力です。真剣に考えましょう！



もしエコロジーの団体と言われるグリーンピースが、こんなにこの出来事に介在しなかったら、われわれはこれほどの国際問題に遭遇したでしょうか。単純な疑問が浮かんで来ます。グリーンピースは、ソビエトやアメリカや中国の最後の核実験のとき、どこにいたのでしょうか？ どうもグリーンピースは私たちには、ヨーロッパ大陸にのみ関わっているように見えます……それにグリーンピースの活動に必要な資金が、前述の三つの大国のどこかから来ているのではないのでしょうか……

二つの質問が提起されます。

1. フランスは（核の）研究をやめなければならないのでしょうか。そして核爆弾所有諸国を前にして信頼性を失わなければならないのでしょうか？
2. フランスはレーザー・シミュレーションをマスターできるように研究を続けるべきでしょうか。そして列強にひけを取らないようになるべきなのでしょうか？

その答は簡単ではありません。多くの国が実験をやめているのに、こんな決定をするのは、ある人々にとって挑戦的と思われることでしょう。日本人はこの悪魔的な兵器にきわめて高価な代償を払いました。私はこの兵器が二度とふたたび使われることがないよう心から願うものです。

フランソワ・ミッテランのこの一節をもって終わりにいたします。

「木々のリズムは、世紀の（百年単位の）リズムである」

#### フランス核実験問題 余話

### “反仏”投書の怪

シラク大統領の核実験強行で、世界中に抗議の声が広がっていた9月12日、日本のある大新聞の投書欄に、パリに七年間留学したという東京の二十五歳の女性の声が当然実名入りで載りました。その主旨は——在仏の経験からして、フランス人は身勝手に人種差別的で、核実験への日本人の抗議に耳を貸さないのもまさにフランス的。今後は「自由の国」などというフランスへの幻想を捨てて精神的に距離をおこう、という過激なものでした。しかしフランス人の60%以上が核実験に反対している現実を見ても、このような「何もかも反フランス」の考え方は理性的でなく、核反対の運動にとってもむしろマイナスであると考えた私は、日仏友好の立場からすぐ反論の意見を新聞社に送りました。数日後、新聞社から連絡があり「明日反論のご意見を掲載する予定でしたが、女性の投書そのものに疑義が生じているので今回は見送らせていただく」とのこと。納得いかない思いでいたところ、翌日の投書欄の片隅に『おわび』として、問題の文章は「…別人の投書と判明いたしました。××さんにはご迷惑をおかけしたことを深くおわびします」。他人の名をかたって、もっともらしい作文で反仏を煽る奴はいったい誰なの？ 真相が知りたいものです。

（事務局・井土真杉）

### A propos des essais

Si il y a un auteur que j'affectionne particulièrement, c'est Marcel Pagnol. Il est de ces écrivains qui par la simplicité, par la logique du texte, peut exprimer les choses les plus graves, les plus sensibles, les plus délicates; avec amour mais sans jamais exprimer la haine. Je voudrais citer un petit paragraphe de Marcel Pagnol de son merveilleux livre " Manon des sources".

Il disait ceci:

— Les mains dans les poches, la tête basse, il s'avança au milieu des fleurs. Tout à coup, il s'arrêta, leva la tête et répondit avec force:

" Pas du tout, non, pas du tout! Celui qui a tort, c'est celui qui se trompe le premier. Et qui est-ce qui a commencé? C'est toi."

A la question, pourquoi Jacques Chirac a-t-il décidé la reprise des essais nucléaires? La seule réponse plausible qui me vient à l'esprit est celle-ci: "Mais qui a commencé?"

On ne peut juger un pays ou un peuple sur une telle décision.

On n'a pas le droit de penser que les français sont des gens qui aiment la guerre. A la date d'aujourd'hui plus de quarante soldats Français (casques bleus) ont payé de leur vie pour défendre la paix en Bosnie. Dans beaucoup de conflits mondiaux (Rwanda Zaire ) la France a toujours été aux avant postes de la cause humanitaire.

Cette décision a été prise par Jacques Chirac et lui seul.

C'est peut-être une erreur. Les derniers sondages en France indiquent qu'environ 60% des Français sont contre la reprise des essais. Je pense que cette décision aurait dû être prise par vote à l'assemblée Nationale, ou par référendum.

Combien de pays dans le monde possèdent l'armes atomique? Les Japonais le savent-ils vraiment? Combien de pays dans le monde continuent d'essayer de fabriquer secrètement la bombe? (ex.Irak, Iran, Corée du nord etc.) Est-ce que ces soupçons envers ces pays ne constituent pas une menace pour l'humanité?

L'arme atomique est une technologie de pointe, et comme toutes technologies de pointe, elle nécessite des essais et de la re-



cherche. Malheureusement pour des raisons politiques et scientifiques, la France a accumulé du retard. Comment prétendre posséder l'arme atomique, si l'on en maîtrise pas la technologie. Ces quelques essais sont une course contre le temps. Huit essais sont prévu, mais si nous avons acquis la technologie nécessaire à la simulation laser, tous les tirs ne seront pas effectués.

Mais malheureusement cette arme si terrible beaucoup de pays la possède. La force nucléaire Française n'est pas une force d'attaque mais une force de dissuasion. Soyons sérieux!

Si l'organisation dite "écologique" Greenpeace n'avait pas à ce point médiatisé cet événement, serions nous arrivés à un tel problème international? Une question simple me vient à esprit. Où se trouvait Greenpeace lors des derniers essais Soviétiques, Américains ou Chinois? Greenpeace nous ferait-elle l'honneur de ne s'occuper que du continent européen..... Ou bien est-ce que l'argent nécessaire au fonctionnement de Greenpeace ne vient-il pas d'un des trois pays cités plus haut.....

Deux questions se posent.

1. La France doit-elle stopper ses recherches, et donc perdre sa crédibilité face aux pays possesseurs de la bombe?
2. La France doit-elle continuer ses recherches afin de pouvoir maîtriser la simulation laser, et donc être compétitive par rapport aux autres puissances?

La réponse n'est pas simple. Une telle décision alors que beaucoup de pays arrêtent les essais, peut paraître provocante pour certains je l'admets. Les Japonais ont payés très cher le prix de cette arme diabolique, et je souhaite de tout mon coeur qu'elle ne sera plus jamais employée.

Je terminerai par cette phrase de François Mitterrand:

"Le rythme des arbres est celui des siècles."

JF Damême

INFORMATION

## 9/10～10/22(日)エルミタージュ美術館展

——19～20世紀フランス絵画—— 津市・三重県立美術館

ロシアのエルミタージュ美術館の所蔵品によって、ヨーロッパの近世および近代絵画の流れをたどるシリーズの三回目。今回は新古典主義からフォービズム、キュービズムにいたるフランス美術の流れから、48人の作家100点の作品が展示されます。アングル、ドラクロワ、コロー、ミレー、モネ、シスレ、ルドン、マチス、ピカソetc.

## 11/26(日)三重県・草の根国際交流フェスタ

PM1:00～3:30 三重県総合文化センター・女性センター

三重県下の国際交流団体が一堂に会し、日ごろの活動を披露、交流するとともに、国際交流ボランティアの育成を図る催し。三重日仏協会も活動を紹介するパネル展示やドミニクさんのフランス・パン試食屋台で参加します。会員の皆さんがお気軽に足を運んでいただくようねがっています。

## 11/28(火)針谷宏弥ピアノ・リサイタル

——ガブリエル・フォーレ生誕150年記念——

PM7:00 津リージョンプラザお城ホール

夜想曲 5. 6. 7番 舟歌 2番ほか、すべてフォーレの作品を演奏

入場料 一般2,000円 大学生以下1,500円

三重日仏協会・後援事業

## 96/1/20(予定) 文芸講演会 渡辺芳敬先生

本会会員でフランス語入門講座の講師もお願いしていた渡辺先生が、三重大学から横浜市立大学に移られて二年。この間ボルドー大学で3ヵ月、日本語・日本文学を講義された体験も含めて、お得意の映画のお話などをうかがう予定。

時間、場所、演題未定。追ってお知らせします。

### ★フランスミニミニ情報★

### モン＝サン＝ミシェル 再び島に

13世紀にブルターニュとノルマンディーの境にある島に造営されたモン＝サン＝ミシェル僧院は、1870年に島を潮流から守り、本土との交通の便を図るという名目でつくられた堤防によって本土と結び付けられたが、その結果として湾内に流れ込む砂の行き場はなくなるし、押し掛ける自動車による公害もひどくなる一方だった。モン＝サン＝ミシェルは1987年にユネスコの人類文化遺産に登録されたが、今や毎年300万を越える観光客がここを訪れている。フランス政府は去る3月に、モン＝サン＝ミシェルを本来の島にかえすという計画を発表した。それによれば現在、道路として利用されている堤防を廃止して、そのかわりに長さ1kmの橋を建設、潮の満ち干に伴う海水の動きを妨げないことで、満潮時に湾内に運ばれる堆積物を沖に出すことを可能にする一方、自動車の通行は島の住民270人と島に働き行く人、そして島内のホテルの宿泊客に限るという。その他の観光客は本土内に設けられる有料駐車場（収容能力3,300台）に車を止めて、そこから先はケーブル式の有料シャトルを利用するか、あるいは徒歩または自転車でも島に向かわなくてはならない。この計画の費用は5億5,000万フランと見積もられているが、そのうち54%を国費で、36%を関係地方自治体の負担でまかない、残りは駐車場の収入を充当することになっている。

フランス大使館発行 フランス便り 8・9月号より